

Title	中国におけるフッサールの受容
Sub Title	Husserls rezeption in China
Author	倪, 梁康(Ni, Liangkang) 吉川, 孝(Yoshikawa, Takashi) 譽田, 大介(Honda, Daisuke) 渡邊, 端(Watanabe, Mizuho)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.111 (2004. 3) ,p.171- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000111-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 翻 訳 —

中国におけるフッサールの受容

倪梁康 (Ni Liangkang)

中華人民共和国 廣州 中山大学哲学科

— 吉川 孝*・譽田大介*・渡邊 瑞** 訳 —

近代中国において翻訳に関する最も重要な実務家であり理論家であった嚴復 (Yan Fu) (1854–1921) が、1896年に Th. H. ハクスリーの『進化と倫理 (Evolution and Ethics)』という著作を中国語に翻訳し、その二年後にそれを公刊したとき、彼は、自分がそのことによって中国への西洋哲学の導入の本来的な歴史を開いたということにまだ気づいていなかった。それに続く数十年のあいだに、西洋哲学の数多くの著作が中国語で出版され、とりわけ、例えば主意主義、プラグマティズム、生の哲学、実証主義のような現代西洋哲学の重要な著作が次々と出版されたのであるが、それらは20世紀前半の中国において大きな影響力を発揮する可能性を秘めていた。

しかしながら、エトムント・フッサールの現象学的哲学の受容は、比較的遅い時期になってようやく始まり、全体として見ればかなりゆっくりと行なわれたのである。

東洋と西洋とのあいだの文化交流の近代的な歴史を振り返ってみると、隣国の日本からはすでに20年代、30年代に、例えば、九鬼周造や田辺元のような多くの若い学生や学者がドイツに渡り、フッサールやハイデガーのもとで学んでいた。その同時期に現象学が日本へと導入されること

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 (哲学)

** 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程 (哲学)

によって、フッサール現象学はかなり早くから西田幾多郎(1870-1945)——彼は1916年にすでにフッサールの『論理学研究』に関する講義を行なった——のような東洋の思索者のもとに定着して、日本の西洋哲学研究においてますます注目を呼び起こすことができたのである。日本に比べてみると、当時（つまり、前世紀前半において）ドイツで現象学を研究した中国人はほんの僅かしかいなかった。そのなかではこれまで次の三人の名前が一般的に知られている。後に北京の清華 [Qinghua] 大学で講義した沈有鼎 (Shen Youding), 後に南京大学, 続いて北京大学で教鞭をとった熊偉 (Xiong Wei), 1946年ごろハイデガーとともに『Dao De Jing (道徳經)』の翻訳を試み¹, 後に台北の輔仁 [Fujen] 大学で講義した蕭師毅 (Xiao Shiyi, Paul Hsiao) である。厳密に言えば、これら三人の中国の学者が習得したのは、初期ハイデガーの現象学であった。彼らは現象学の創始者の思惟に関しては何も書き表さなかったようである。

比較的新しい調査の成果を基にすれば、確かに、フッサールとその若干の根本思想はすでに20年代から40年代にかけて、多くの学者や研究者によって個々の著作のなかで言及されていたのであり、例えば、近代の哲学者張東蓀 (Zhang Dong-Sun, 1886-1973) は、「新実在主義の論理主義」², 「世界観と生の直観」³, 「構想中の哲学」⁴ などの論文でそうした言及をしている。しかし、この執筆者はもっぱら日本で学んでいたのであるから、彼の場合、フッサールとその現象学に関するそうした知識は、ドイツにおける現象学陣営に直接その由来を持つようになる前に、日本の現象学者たちによって媒介されていたと推察することができるだろう。

しかし、極めて注目に値するのは、楊人榎 (Yang Ren-Pian) によって

¹ Paul Hsiao 参照, 「われわれは木材市場で落ちあった」, G. ネスケ編「マルティン・ハイデガーの思い出」, Pfullingen, 1977年.

² 出版は、『東方雑誌 (Zeitschrift Osten)』, 第19巻, Nr. 17, 1922年.

³ 出版は、『東方雑誌 (Zeitschrift Osten)』, 第25巻, Nr. 718, 1928年.

⁴ 出版は、最初、『新哲學論叢 (Neue philosophische Schriften)』??

「現象學概説 (Einführung in die Phänomenologie)」⁵ というタイトルで、また倪青原 (Ni Qing-Yuan) によって「現代西洋哲學之趨勢 (Die Tendenzen der modernen westlichen Philosophie)」⁶ というタイトルで、それぞれ 1929 年と 1947 年に公刊された二つの論文である。前者の論文「現象學概説」は 11 頁から成り、フッサール現象学について中国語で執筆された最初の体系的な叙述とみなされる。この論文は、1. 序論、2. 現象学とは何か、3. 現象学の創始者、4. 現象学という概念、5. 現象学の基本、という構成になっている。「ノエシス」「ノエマ」「現象学的エポケー」「自然的態度」「現象学的還元」「本質直観」「志向性」「把持」「予持」などのフッサールの概念が原典とともに取り扱われ、ボルツァーノ、リップス、ブレンターノ、ディルタイ、リッケルト、シェーラー、ハイデガー、ハルトマン、ライナッハなどの名前に言及されているが、さらにそこには、テオドール・レッシング、エルンスト・クリーク、オットー・ヴァイニングーのような、おそらくは現象学運動に属してはいたものの、今日ではもはや実際には視野に収められていない人たちの名前も含まれている。

そして「現代西洋哲學之趨勢」というもう一つの論文は、全部で七節のうち一つの節が「現象学という学派」(7 頁) に割かれている。フッサール現象学はこの執筆者によって「ヨーロッパ大陸の合理論とイギリス経験論の融合の頂点として考察されている」。ここでは、フッサールの叙述や「還元」「構成」「事象そのものへ」等々の彼の根本概念、ならびに『論理学研究』『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』^{イデーエン}『形式的論理学と超越論的論理学』『経験と判断』という彼の著作のみならず、フッサールの現象学派に関する特徴づけも取り扱われている。しかもこの執筆者は、当時ごく限られた人たちにのみ表明されていた、現象学運動についてのフッサールの見解、つまり現象学は確かによく知られてはいるが、しかし、実

⁵ 出版は、『民鐸 (Zeitschrift Volksglocke)』, 第 10 卷, Nr. 1 (1929 年)。

⁶ 出版は、『學原 (Campus Scientiae)』, 第 1 卷, Nr. 3 (1947 年)。

のところほんの少数にしか理解されていないという見解に精通しているように思われる。——全体として見るならば、この二人の執筆者がドイツで教育を受けることなしに、これらの論文を書くことができたと考えるのは難しい。

20年代から40年代にかけてヨーロッパに渡ることができた学生はごく少数であり、西洋哲学を研究したものはさらに少なかった。そのことに目を向ければ何ら驚くに値しないのであるが、フッサールと交際を持った可能性が考えられうる中国人というのは、現象学一派のなかでもたった一人だけ——少なくともよく知られた文献においては——なのである。フライブルクのフッサール宅でフッサールやフィンクと最初に出会ったときのことを思い出しつつ、これまで紙面上にのみ存在するこの中国人に言及したのは、J. パトチュカである。「フィンク以外に一人の日本人と一人の中国人がそこにいましたが、その二人は明らかにすでにフィンクと学問的に意見を取り交わす関係にありました。フィンクは後になって一度、彼らの精神的な特質を性格づけてくれたこともありました。長い年月が経ったために、私は彼らの名前を失念してしまいました。われわれはもちろん現象学やその精神的な使命について語りましたが、後者は『現象学の世界概念』が問題になったときフッサールが好んで口にする主題でした。私が思い出すのは、フッサールが『やはり、われわれはここではまぎれもなく敵なのですね』と言ったときのことです。私とフィンクとを指して『敵』、中国人と日本人とを指して『敵』と言い、『そして、こうした敵対関係にあるわれわれすべてを超えて、現象学があるのです』と付け加えたのでした」⁷。パトチュカが残念ながら中国人の名前を思い出せなかったので、こ

⁷ J. パトチュカ「フッサールの思い出」、W・ビーメル編『人間の世界 哲学の世界 パトチュカのための記念論文集』Den Haag 1976年、IX頁。

フッサールの側から中国人の人間性に関する若干の言及が、例えば、以下の引用におけるように示されている。「ヨーロッパに来て、われわれの音楽や文学などを学ぶ中国人は、それらそのものを本当の意味において学んでおらず、つまり

のことに関心を持つ歴史家はそれが誰であったのかをこれからも調査する必要がある。それでも今、ここで言及されている中国人が後にやはり現象学について何らかの著作を公刊しているものと仮定してよいのであれば、その人物は論文の内容から考えて、先の楊人楨 (Yang Ren-Pian) であると言ってもほとんどよさそうなものである。彼はフッサール現象学とその前景ならびに背景に精通しているのみならず、明らかにドイツ語の言語知識を自在なものとしていた。ただし、この論文が出版されたのは1929年であり、したがって、1933年のフッサールのもとでのパトチュカとそこにいたらしい中国人との出会い以前にすでに出版されている。時間的な観点からしてより可能性が高いのは、先に名を挙げた二人の著者のうちのもう一人である倪青原 (Ni Qing-Yuan) ということになるろう。しかし、これらはすべて単なる推測にすぎない。この方面に関する調査の新たな結果によれば、そこで言及されていた中国人は沈有鼎 (Shen Youding) である可能性が高い。彼はフライブルクで学んだ後、ベルリン大学で講義をしている。最近公刊された彼の遺稿集のなかに、彼が前世紀の30年代にフッサールを個人的に知っていたことや、フッサールが彼に対して個人的に「とても多くの現象学の著作があるけれども、わたしの著作だけが真に現象学的なものなのです」などと述べていたことを読み取ることができるのである。

ヨーロッパの文化世界を学んではいない。それらは彼には易々とは経験可能でない。彼はまず自己のうちにヨーロッパ人を打ちたてなければならない。彼は彼の経験の前提から外へ出て、歴史的理解の道を見出さなければならないし、自身のうちにヨーロッパ的自我をまず構成し、ヨーロッパ人の精神的な眼でもって見ることを学ばなければならない。そのような自我にとってのみヨーロッパの文化は経験可能であり、現存するのである。ある不完全にしか獲得されえない自己変革(人格のある種の地軸化)という迂路——それはかなり間接的なことであるが——に基づいてのみ、心的なものに対して本当の客観性が考えうるのであり、遠く隔たった文化に属する人間の本当の自己理解が考えうるのである。そして、その場合の客観性とは、理念化に基づく理念、すなわち、理念的にはすべての人間がこの自己変革を遂行する可能性を持つという形の理念化に基づく理念ということになるだろう」(Hua XXVII, 163頁)。

いずれにせよ、ここで確認されるべきは次のことである。つまり、20世紀の前半の時点で一人の中国人がドイツのフッサールのもとで現象学を学び、その後フッサールや現象学運動の思考や著作を中国に紹介したり、中国語に翻訳したりすることができたかどうかという問題を度外視しても、これらの思考や著作が中国の文化圏や言語圏において長いあいだずっと顧みられることもなければ、影響力をもつこともなかったということである。

1963年になって初めて、中国におけるフッサール受容に関連した二つの出来事が生じた。一つは『哲學譯叢 (Zeitschrift für die philosophische Übersetzung)』誌、第3号にI.ケルンの論文「エトムント・フッサールの哲学における現象学的還元にいる三つの道」⁸の翻訳が掲載されたことである。この論文は1年前にオランダの雑誌『Tijdschrift voor Filosofie (哲学雑誌)』にまずドイツ語で発表された⁹。もう一つは、台湾において師範大学の李貴良 (Li Guiliang) によって『胡塞爾的現象學 (Husserls Phänomenologie)』という研究書が出版されたことである。

しかしながら、中国大陸においてフッサール現象学と現象学運動は依然としてあまり大きな影響力をもつことはなかった。というのも1966年に「文化大革命」が始まり、非-マルクス主義的哲学に取り組むことが10年以上も不可能になったからである。もっともその時代においても、李幼蒸 (Li Youzheng) は全く個人的に北京図書館においてフッセリアーナ——これはこの著作集の編者であるヴァン・ブレダ神父が北京図書館に寄贈してくれたものである——を研究していたのではあるが。

フッサール現象学の有意義な受容は1978年以降にようやく始まる。この年の中国ではいわゆる開放政策が採られ、それによって「西洋的-ブル

⁸ 原典の初出は『Tijdschrift voor Filosofie』誌、XXIV (1962年)。

⁹ 『Zeitschrift für die philosophische Übersetzung』の同じ号には、さらにオランダ人哲学者 W. A. Luijpen の著作『実存的現象学 [Existential Phenomenology]』(Pittsburgh, 1960年)の書評の抄訳も掲載されている。

「フッサールの哲学」の輸入禁止が解かれたのである。まず、中国人著者による現象学のいくつかの論文が雑誌に掲載された。1963年以降で最初のものと思われる論文は、広東の中山 [Zhongshan] 大学教授、羅克汀 (Luo Keting) による「胡塞爾的現象學是對現代自然科學的反動 (Husserls Phänomenologie ist eine Reaktion gegen die moderne Naturwissenschaft) [フッサール現象学は近代自然科学に対する反動である]」¹⁰ である。その論文は現象学と近代自然科学との対比を、退歩と進歩との対比として考察したものである。また、同時代の西洋哲学についての教科書においても、現象学と実存主義について章が割かれるようになった。例えば、杜任之 (Du Renzhi) 編『現代西方著名哲學家述評 (Kommentare zu den bekannten gegenwärtigen westlichen Philosophen) [解説 著名な現代の西洋の哲学者たち]』(北京, 1980年) があり、フッサールについての章は先の李幼蒸 (Li Youzheng) によって執筆されている。これとはまた別の大著『現代西方哲學 (Die westliche Philosophie der Gegenwart)』(北京, 1981年, 第5版, 北京, 1987年) は、上海の復旦 [Fudan] 大学教授、劉放桐 (Liu Fangtong) によって編集されたものであり、範明生 (Fan Mingsheng) による現象学の章を含んでいる。1987年に出版されたのは、フッサールについての研究書、すなわち倪梁康 (Ni Liangkang) による修士論文「胡塞爾：通向先驗本質現象學之路 (Husserls Wege zur transzendental-eidetischen Phänomenologie—Von der phänomenologischen Methode) [超越論的-形相的現象学にいたるフッサールの道——現象学的方法について]」¹¹ である。この修士論文はフッサールについての中国でおそらく初めての修士論文であり、いずれにせよ初めて公刊された修士論文である。その数年後、フッサールについての中国人による

¹⁰ 『哲學研究 (Philosophische Forschungen)』誌, 1980年, Nr. 3, 67-76頁に掲載。

¹¹ 『文化：中國與世界 (Kulturen: China und die Welt)』, 第2巻, 北京, 1987年, 236-324頁に掲載。

初めての博士論文が上梓されたが、これが倪梁康 (Ni Liangkang) によってドイツ語で書かれた『エトムント・フッサールの現象学における存在信憑の問題——フッサールとともに [Das Problem des Seinsglaubens in der Phänomenologie Edmund Husserls—Ein Versuch mit ihm]』(博士論文, Freiburg, 1991年)¹² である。

同じ頃、かなりのフッサールの著作が中国語に翻訳された。例えば、『現象学の理念』(1907年の5講義, フッセリアーナ第2巻)が倪梁康 (Ni Liangkang) によって翻訳された(上海, 1986年, 台北, 1987年)。『厳密な学としての哲学』と『ヨーロッパ的人間性の危機と哲学』(1935年のウィーン講演)は呂祥 (Lu Xiang) によって英語から翻訳され(北京, 1987年), 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』第一部, 第二部は張慶熊 (Zhang Qingxiong) によって翻訳された(上海, 1989年)。90年代になると、フッサールのさらに別の著作が中国語で出版された。『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第1巻』は1930年のフッサールによる「あとがき」とともに、李幼蒸 (Li Youzheng) によって翻訳された(北京, 1994年, 台北, 1994年)し、クラウス・ヘルトによって編集され、フッサール現象学への入門と中国版への序がつけられた『現象学的方法』(テキスト抜粋1)は倪梁康 (Ni Liangkang) によって(上海, 1994年), 『論理学研究』第1-2巻は倪梁康 (Ni Liangkang) によって(上海, 1994-1999年, 台北, 1994-1999年), 『デカルト的省察』は張憲 (Zhang Xian) と(台北, 1995年)張廷國 (Zhang Tingguo) によって(北京, 2002年), 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(フッセリアーナ第6巻)は、王炳文 (Wang Bingwen) によって翻訳された(北京2002年)。『内的時間意識の現象学』(フッセリアーナ第10

¹² この博士論文は最近になって『エトムント・フッサールの現象学における存在信憑』というタイトルで出版された。Phenomenologica (153), Dordrecht 他, 1999年。

卷)や『形式的論理学と超越論的論理学』(フッセリアーナ第17巻)といったフッセリアーナのいくつかの巻が印刷中ないし翻訳中であり、近日中に公刊されるだろう。

一般的な傾向として言えば、フッサール現象学はたしかに中国での受容の当初においては、大きな関心をもって迎え入れられた。例えば、『現象学の理念』の中国語訳(1986)は短期間のうちに3度増刷され、中国大陸だけで発行部数が13万部にも達した。ただしより正確に考察してみれば、それにもかかわらず、このフッサール哲学への関心はそれ自身によって直接に引き起こされたものではなく、フッサールの影響を受けたり、フッサール哲学と対決したりした、ハイデガー、シェーラー、サルトル、ガダマー、ハーバーマス、デリダなどの同時代の思惟の企てによって動機づけられ、媒介されたものであった。

とはいえ、今日フッサール哲学は、中国人研究者たちにとって、現代の西洋哲学に取り組む際には避けて通れないものとみなされるようになってきている。

現在中国の文化圏において、フッサール現象学は多くの重要な哲学の教育機関で——しかもヨーロッパで教育を受けた主に比較的若い教授たちによって——教えられている。北京大学の靳希平(Jin Xiping)教授と張祥龍(Zhang Xianglong)教授、中山大学の倪梁康(Ni Liangkang)教授、武漢[Wuhan]大学の鄧曉芒(Deng Xiaomang)教授、上海の復旦[Fudan]大学の張慶熊(Zhang Qingxiong)教授、張汝倫(Zhang Rulun)教授、香港の中国大学の關子尹(Kwan Tze-wan)教授、張燦輝(Cheung Chan-fai)教授、劉國英(Lau Kwok-ying)教授、台湾の国立大学の汪文聖(Wang Wen-sheng)教授、台湾の清華[Qinghua]大学の黃文宏(Huang Wen-hong)博士等々。これまですでに多くの博士たちが中国の大学で教育を受け、フッサール現象学について博士論文を書いてきた。現在はもっと多くの博士課程在籍者がフッサール現象学の分野で研究をすす

めている。

1994年10月、第1回現象学会議が南京で開催されたが、そのときのテーマは「現象学の根本問題」であった。この会議には、ヨーロッパやアメリカからも現象学を専門にする哲学者たちが参加し、ドイツ現象学会の当時の会長であったクラウス・ヘルト教授も出席した。この会議において中国現象学会(GPhF)が結成された。その会員は、実際に中国における西洋哲学研究の領域で極めて大きな力を発揮している比較的若い研究者グループからなっている。中国におけるGPhFの結成は、現象学研究が中国において一つの大きな趨勢となったことのあらわれである。

1994年以降、現象学会議は中国で毎年開催されている。1995年には合肥[Hefei]で「現象学的方法」というテーマで開催され、1996年には香港で「間文化性と生活世界」、1997年には上海で「現象学と解釈学」、1998年には海南[Hainan]で「現象学と言語」、1999年には北京で「現象学と近代」、2001年には北京で「現象学と中国文化」、2002年には杭州で「現象学と芸術」というテーマで開催された。2003年には第9回現象学会議が武漢で「現象学と実存哲学」というテーマで、2004年には第10回会議が廣州で「現象学とエートス」というテーマで計画されている。

1996年の香港での会議のときに、香港現象学会が設立された。それ以降、中国現象学会と香港現象学会のあいだでの永年にわたる共同作業が始まった。さらには、1999年4月に台湾国立大学で、現象学研究センターが創設された。そこでは同時に、台湾現象学会の設立が計画される。長い準備を経て、2000年に、それゆえ、現象学がちょうど100年の歴史をもつことになる時に「北京大学現象学研究記録センター」が設立される。そして2002年には、廣州の中山[Zhongshan]大学に現象学研究所が設立されている。今日では「両方の組織は中国全体における現象学研究の二つの極であり、それゆえ北では北京大学が、南では中山大学が極になっている」と言うことができよう。

1994年以來、中国語圏の現象学研究のなかで『中國現象學與哲學評論 (Journal für die phänomenologische und philosophische Forschung in China)』という論集が発行されている。第1巻は1995年に「現象學的基本問題 (Grundprobleme der Phänomenologie)」というタイトルで発行され、以下「現象學的方法 (Die phänomenologische Methode)」、 「現象學與語言 (Phänomenologie und Sprache)」、 「現象學與社會理論 (Phänomenologie und die soziale Theorie)」などのタイトルで発行されている。

目下のところ、現象学は中国において受容の後期ではあるにしても、まだ受容の段階にある。日本や韓国といった東アジアの隣国と比べると、中国における現象学研究の領域にはまだ多くの隙間があり、そこはこれから充填されねばならないのである。

しかし、創造的かつ独創的な研究への大きな希望は存在している。一方では、中国の現象学は意識分析の独自の伝統と結びつけられることができ、そのことによって新たな地平が開かれる可能性がある。一般的に、現象学は、今日の中国ではとりわけある種の意識哲学として理解されている。このことは、フッサールがもともと現象学を創始した際にもっていた意図と結びつく。こうしたもともとの意図は、現象学と伝統的なヨーロッパの内在の哲学、ないしは精神の哲学（あるいは心の哲学 [Philosophy of Mind]）とのあいだの橋渡しをするだけではない。それはまた、東洋の思索者にとってとりわけ大切なことをも、つまり、一方の側の現象学と、他方の側の仏教的な意識の理論（唯識仏教、すなわちヨガの中国的形態）や儒教的な心の理論とを、間文化的かつコミュニケーション的に結合することを可能にするのである。ますますいろいろな比較研究がこうした方向で行なわれたり、顧慮されたりしている。さらには、ヨーロッパにおける現象学運動と、同じくここ100年で始まっている仏教的な意識論におけるルネッサンスとの並行性も、議論の主題となる。現象学運動のス

ローガンは「事象そのものへ帰れ」であり、それに対して仏教的な意識論のルネッサンスのローガンは「仏典とそのなかに告知される仏陀の意志へ帰れ」であるのだが、それらの入念で繊細な意識分析は次のことを示している。すなわち、人類の異なった文化のなかでも、さまざまな思考様式においても、意識の研究という共通の理論的関心やその等しい成果が見いだされうるということが示唆されているのである¹³。

しかしながら他方で、現象学的方法的な固有性というのは、アジア的な文化空間のうちでさらなる魅力や影響力を明らかにもっているものなのである。すなわち、「事象そのものへ」という呼びかけは、独自に思考し、生産するという哲学の根本的な要求と一致している。現象学は地に足のついた研究を要求する哲学なので、哲学的な探求にあたって、対話や議論のために共通の土俵を形成しようとする望みをかなえることになる。現象学が要求している直接的な直観というのは、哲学を営むにあたって粗大で空虚な概念を避けるために役立つことができる。そして、同じく現象学が掲げているような、思考態度における厳密さや入念さは、研究者がもはや真理の創設者や所有者として体系を作り出したり、諸々のプログラムを提供したりするのではなく、むしろ問題を最も単純な形式において取り扱うように導くことができる。現象学というのはいくつかの教義や哲学説といっ

¹³ この分野の最初の研究成果として例えば以下を参照。I. ケルン「現象学的視点から考察される、仏教的意識論の三つの時間形式」、『中国現象學與哲學評論 (Journal für die phänomenologische und philosophische Forschung in China)』第1巻、上海、1995年、所収、351-363頁。陳榮灼 (Chan Wing-cheuk)「ヨガ仏教と現象学：反-自我論の問題」、『鵝湖 [Logein]』第15号、台北、1995年、48-70頁。張慶熊 (Zhang Qingxiong)『熊十力的唯識學與胡塞爾的現象學 (Xiong Shilis Neu-Bewußtseinslehre und Husserls Phänomenologie) [熊十力の新たな意識理論とフッサールの現象学]』上海、1995年。倪梁康 (Ni Liangkang)「唯識學與現象學的自身意識與自我意識 (Selbstbewußtsein und Ichbewußtsein in Yogacara-Buddhismus und in Phänomenologie) [ヨガ仏教と現象学における自己意識と自我意識]」、『中國學術 (China Scholarship)』2002年、第2巻、No. 2、所収。——しかしながら、現象学と仏教の意識論と儒教の心の理論との比較研究は一般的にはまだ十分に展開されてはいない。

たものではなく、具体的な問題に関しての事象に即した記述と分析の実践を意味しているのである。——こうしたことすべてによって、現象学が東洋の文化のなかで最終的に精神的な共同体を見いだすということも可能になる。ここでは、現象学に対する東洋でのあらゆる関心が述べられているわけではないが、それでも大部分の関心については述べられているだろう。

中国におけるフッサール現象学の受容の長い歴史を振り返ってみてよくわかるようになるのは、「フッサールという講壇哲学者の味気ない文体はもともと公の場で議論するのに……適しているわけではない」ということや、その影響はアカデミックな水準に限定されねばならなかったということである。しかも、このことはとりわけ、現象学の思考様式と完全に異なるような文化空間に該当する。しかしながら、現象学の方法上の特性や理論的な成果というのは特定の時代や地域を超えて展開されるような力であるということが、これから繰り返しますます明らかになって行く。中国におけるフッサール現象学の受容の歴史は、ショーペンハウエルが哲学の影響力について語っている次のようなことをよく裏づけることになる。「古くからの通例によれば、この影響は始まるのが遅ければ遅いだけ、長く続くことになるだろう」¹⁴。

¹⁴ A. ショーペンハウエル, 全集第1巻『意志と表象としての世界 I』, Stuttgart und Frankfurt 他, 1987年, 27頁。

中国におけるフッサールの受容

	哲学・現象学関連の文献（著作・論文・翻訳），その他
1896	嚴複 (Yan Fu) による Th. H. ハクスリー 『進化と倫理 (Evolution and Ethics)』の翻訳
1929	楊人榘 (Yang Ren-Pian) 「現象學概説 (Einführung in die Phänomenologie)」
1933	ある中国人とフッサールとの邂逅
1946	蕭師毅 (Xiao Shiyi) による『Dao De Jing (道德經)』の翻訳
1947	倪青原 (Ni Qing-Yuan) 「現代西洋哲學之趨勢 (Die Tendenzen der modernen westlichen Philosophie)」
1963	I. ケルン「エトムント・フッサールの哲学における現象学的還元にいたる三つの道」の翻訳 李貴良 (Li Guiliang) 『胡塞爾的現象學 (Husserls Phänomenologie)』
1966	文化大革命
1978	開放政策
1980	羅克汀 (Luo Keting) 「胡塞爾的現象學是對現代自然科學的反動 (Husserls Phänomenologie ist eine Reaktion gegen die moderne Naturwissenschaft) [フッサール現象学は近代自然科学に対する反動である]」 杜任之 (Du Renzhi) 編『現代西方著名哲學家述評 (Kommentare zu den bekannten gegenwärtigen westlichen Philosophen) [解説 著名な現代の西洋の哲学者たち]』（フッサールの章，李幼蒸 (Li Youzheng)）
1981	劉放桐 (Liu Fangtong) 編『現代西方哲學 (Die westliche Philosophie der Gegenwart)』（現象学の章，範明生 (Fan Mingsheng)）
1987	倪梁康 (Ni Liangkang) 「胡塞爾：通向先驗本質現象學之路 (Husserls Wege zur transzendental-eidetischen Phänomenologie—Von der phänomenologischen Methode) [超越論的—形相的現象学にいたるフッサールの道——現象学的方法について]」
1991	倪梁康 (Ni Liangkang) 『エトムント・フッサールの現象学における存在信憑の問題——フッサールとともに [Das Problem des Seinsglaubens in der Phänomenologie Edmund Husserls—Ein Versuch mit ihm]』
1995	『中國現象學與哲學評論 (Journal für die phänomenologische und philosophische Forschung in China)』発刊
	フッサールの著作・論文の翻訳
1986	『現象学の理念』倪梁康 (Ni Liangkang)
1987	『嚴密な学としての哲学』、『ヨーロッパ的人間性の危機と哲学』呂祥 (Lu Xiang)
1989	『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（第1部，第2部）張慶熊 (Zhang Qingxiong)
1994	『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第1卷』李幼蒸 (Li Youzheng)

	フッサールの著作・論文の翻訳
1994	『現象学的方法』（テキスト抜粋1）倪梁康 (Ni Liangkang) 『論理学研究』（第1巻・第2巻）倪梁康 (Ni Liangkang)
1995	『デカルト的省察』張憲 (Zhang Xian)
2002	『デカルト的省察』張廷國 (Zhang Tingguo) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（フッセリアーナ第6巻）王炳文 (Wang Bingwen)
	会議・組織の動向
1994	第1回現象学会議（南京「現象学の根本問題」） 中国現象学会 (GPhF) 結成
1995	第2回現象学会議（合肥「現象学的方法」）
1996	第3回現象学会議（香港「間文化性と生活世界」） 香港現象学会結成
1997	第4回現象学会議（上海「現象学と解釈学」）
1998	第5回現象学会議（海南「現象学と言語」）
1999	第6回現象学会議（北京「現象学と近代」） 現象学研究センター設立（台湾国立大学）
2000	北京大学現象学研究記録センター設立
2001	第7回現象学会議（北京「現象学と中国文化」）
2002	第8回現象学会議（杭州「現象学と芸術」） 現象学研究所設立（中山大学，廣州）
2003	第9回現象学会議（武漢「現象学と実存哲学」）予定
2004	第10回現象学会議（廣州「現象学とエートス」）予定

※この年表は本文に基づき、訳者によって作成された。本文・年表ともに中国語による文献は、原文通りに中国語と欧語の順に表記され、場合によっては訳者による日本語表記が挿入されている。